

(19) 日本国特許庁 (JP)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2018-38457

(P2018-38457A)

(43) 公開日 平成30年3月15日 (2018.3.15)

(51) Int.Cl.	F 1	テーマコード (参考)
A 4 7 J 27/00 (2006.01)	A 4 7 J 27/00 1 O 3 Q	4 B O 5 5
	A 4 7 J 27/00 1 O 3 P	

審査請求 未請求 請求項の数 4 O L (全 12 頁)

(21) 出願番号	特願2016-172715 (P2016-172715)	(71) 出願人	000006013
(22) 出願日	平成28年9月5日 (2016.9.5)		三菱電機株式会社
			東京都千代田区丸の内二丁目7番3号
		(71) 出願人	000176866
			三菱電機ホーム機器株式会社
			埼玉県深谷市小前田1728-1
		(74) 代理人	110001461
			特許業務法人きさ特許商標事務所
		(72) 発明者	齊藤 毅
			埼玉県深谷市小前田1728番地1 三菱
			電機ホーム機器株式会社内
		Fターム (参考)	4B055 AA02 BA01 CA36 CA44 CA83
			CC23 CC33 CD66

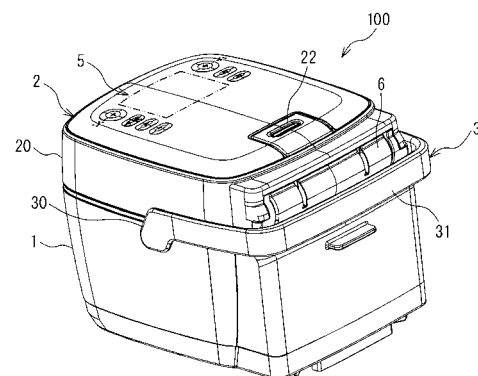
(54) 【発明の名称】 炊飯器

(57) 【要約】

【課題】使用者が、蓋体を開閉する際に、蓋体と本体部との間に指を挟むことがなく、安全に使用できる炊飯器を提供する。

【解決手段】炊飯器は、上面を開口した内釜収納部を有する本体部と、内釜収納部に着脱自在に装着された内釜と、本体部に回動自在に取り付けられて本体部の上面開口を開閉可能に覆う蓋体と、蓋体を本体部に回動自在に連結するヒンジ機構部と、本体部の対向する側面に取り付けられる回転支点部、及び回転支点部を繋ぐ持ち手部を有し、蓋体の上方で起立する起立位置と本体部の背面側で倒伏する倒伏位置との間で起伏するように回動自在なハンドルと、を備えている。ハンドルは、倒伏位置において本体部と蓋体との間を跨がるように持ち手部が配置されている。

【選択図】 図3



【特許請求の範囲】

【請求項 1】

上面を開口した内釜収納部を有する本体部と、
前記内釜収納部に着脱自在に装着された内釜と、
前記本体部に回動自在に取り付けられて前記本体部の上面開口を開閉可能に覆う蓋体と

、
前記蓋体を前記本体部に回動自在に連結するヒンジ機構部と、

前記本体部の対向する側面に取り付けられる回転支点部、及び前記回転支点部を繋ぐ持ち手部を有し、前記蓋体の上方で起立する起立位置と前記本体部の背面側で倒伏する倒伏位置との間で起伏するように回動自在なハンドルと、を備え、

前記ハンドルは、倒伏位置において前記本体部と前記蓋体との間を跨がるように前記持ち手部が配置されている、炊飯器。

【請求項 2】

前記ハンドルの前記回転支点部には、起立位置の前記ハンドルを倒伏させるように付勢する付勢部材が設けられている、請求項 1 に記載の炊飯器。

【請求項 3】

前記ハンドルは、起立位置の前記ハンドルを倒伏させるように重心が倒伏側に偏心されている、請求項 1 に記載の炊飯器。

【請求項 4】

前記蓋体は、閉状態から開状態に回動する際に、前記ヒンジ機構部で連結された側の端部を前記ハンドルの前記持ち手部に当接させて回動する構成であり、

前記本体部の背面側には、前記ハンドルが前記蓋体を当接させた状態で倒伏位置に回動する勢いを緩衝させる緩衝部材が設けられている、請求項 1 ～ 3 のいずれか一項に記載の炊飯器。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、米等の被加熱物を入れた内釜を加熱調理する炊飯器に関するものである。

【背景技術】

【0002】

従来、炊飯器は、例えば特許文献 1 のように、上面を開口した内釜収納部を有する本体部と、本体部の上面開口を開閉可能に覆い、本体部にヒンジ機構部で連結されて回動自在に取り付けられた蓋体と、本体部の対向する側面に回動自在に取り付けられたハンドルと、を備えた構成が知られている。このような炊飯器では、本体部の背面側の側面であってヒンジ機構部の下方となる箇所に、内方へ凹ませた逃がし部を設けて、開状態とした蓋体の下端部と本体部の上面との接触を回避させる場合がある。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0003】

【特許文献 1】特開 2009 - 291261 号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0004】

特許文献 1 に開示された炊飯器に、開状態とした蓋体の下端部と本体部の上面との接触を回避するための逃がし部を設けると、逃がし部が常に露出した状態となる。そのため、このような炊飯器では、使用者がハンドルを回転させて倒伏させた後、逃がし部に指を当てたまま誤って蓋体を開状態にすると、蓋体の端部と本体部の側面との間に使用者の指を挟む虞がある。

【0005】

本発明に係る炊飯器は、上記のような課題を解決するためになされたものであり、使用

10

20

30

40

50

者が、蓋体を開閉する際に、蓋体と本体部との間に指を挟むことがなく、安全に使用できる炊飯器を提供することを目的とする。

【課題を解決するための手段】

【0006】

本発明に係る炊飯器は、上面を開口した内釜収納部を有する本体部と、前記内釜収納部に着脱自在に装着された内釜と、前記本体部に回動自在に取り付けられて前記本体部の上面開口を開閉可能に覆う蓋体と、前記蓋体を前記本体部に回動自在に連結するヒンジ機構部と、前記本体部の対向する側面に取り付けられる回転支点部、及び前記回転支点部を繋ぐ持ち手部を有し、前記蓋体の上方で起立する起立位置と前記本体部の背面側で倒伏する倒伏位置との間で起伏するように回動自在なハンドルと、を備え、前記ハンドルは、倒伏位置において前記本体部と前記蓋体との間を跨がるように前記持ち手部が配置されているものである。

10

【発明の効果】

【0007】

本発明に係る炊飯器によれば、ハンドルの持ち手部が、倒伏位置において本体部と蓋体との間を跨がるように配置されているので、ハンドルを倒伏させるとヒンジ機構部の近傍に位置する本体部の側面及び上面を持ち手部で覆うことができる。よって、本発明に係る炊飯器は、ハンドルを倒伏させた状態において、使用者がヒンジ機構部の近傍に位置する本体部の側面及び上面に指を当てることができないので、蓋体を開閉する際に、蓋体と本体部との間に指を挟むことがなく、安全に使用できる。

20

【図面の簡単な説明】

【0008】

【図1】本発明の実施の形態1に係る炊飯器を前面側から見た斜視図である。

【図2】本発明の実施の形態1に係る炊飯器の側面図である。

【図3】本発明の実施の形態1に係る炊飯器を背面側から見た斜視図である。

【図4】本発明の実施の形態1に係る炊飯器であって、蓋体が開いた状態の側面図である。

【図5】本発明の実施の形態1に係る炊飯器であって、蓋体が開いた状態を背面側から見た斜視図である。

【図6】本発明の実施の形態1に係る炊飯器であって、本体部のカバーを外して内部構造を示した斜視図である。

30

【図7】図6で指示したX線矢視要部拡大図である。

【図8】本発明の実施の形態1に係る炊飯器の付勢部材の機能を説明した要部拡大図である。

【図9】図6で指示したY線矢視要部拡大図である。

【図10】本発明の実施の形態1に係る炊飯器であって、ハンドルの重心を倒伏側に偏心させた構成を示した側面図である。

【図11】従来の炊飯器を背面側から見た斜視図である。

【図12】従来の炊飯器であって、蓋体が開いた状態の側面図である。

【図13】従来の炊飯器であって、蓋体が開いた状態を背面側から見た斜視図である。

40

【図14】本発明の実施の形態2に係る炊飯器を背面側から見た斜視図である。

【図15】本発明の実施の形態2に係る炊飯器の側面図である。

【図16】本発明の実施の形態2に係る炊飯器であって、蓋体が開く途中段階を示した側面図である。

【図17】本発明の実施の形態2に係る炊飯器であって、蓋体が開く途中段階を背面側から見た斜視図である。

【図18】本発明の実施の形態2に係る炊飯器であって、蓋体が開く途中段階の要部拡大図である。

【図19】本発明の実施の形態2に係る炊飯器であって、蓋体が開いた状態を背面側から見た斜視図である。

50

【発明を実施するための形態】**【０００９】**

以下、本発明の実施の形態に係る炊飯器について図面を参照して説明する。なお、この図面の形態によって本発明が限定されるものではない。また、以下の図面では各構成部材の大きさの関係が実際のものとは異なる場合がある。

【００１０】

実施の形態１．

図１は、本発明の実施の形態１に係る炊飯器を前面側から見た斜視図である。図２は、本発明の実施の形態１に係る炊飯器の側面図である。図３は、本発明の実施の形態１に係る炊飯器を背面側から見た斜視図である。図４は、本発明の実施の形態１に係る炊飯器であって、蓋体が開いた状態の側面図である。図５は、本発明の実施の形態１に係る炊飯器であって、蓋体が開いた状態を背面側から見た斜視図である。図１～図５に示す本実施の形態に係る炊飯器１００は、被加熱物（例えば米および水）を加熱して炊き上げる家庭用炊飯器である。炊飯器１００は、図１～図５に示すように、上面を開口した内釜収納部１０を内部に有する本体部１と、内釜収納部１０に着脱自在に装着された内釜４と、ヒンジ機構部６によって本体部１に回動自在に連結されて本体部１の上面開口を開閉可能に覆う蓋体２と、を備えている。また、炊飯器１００は、使用者が手で持って炊飯器１００を運搬するためのハンドル３を備えている。

10

【００１１】

本体部１は、外観が有底筒状とされ、内釜４を内部に着脱自在に装着する内釜収納部１０と、内釜４を誘導加熱する加熱コイル（図示は省略）と、内釜４の温度を検知する鍋底温度センサー（図示は省略）と、内釜４の胴部を加熱させる側面ヒーター（図示は省略）と、操作表示部５と、を有する。本体部１は、内蔵された制御部によって、各部および各装置を駆動制御して炊飯工程を実行する。

20

【００１２】

本体部１の前部側には、蓋体２の開閉を行う蓋開閉ボタン１１が設けられている。使用者は、蓋開閉ボタン１１を押すことで、蓋体２の閉状態が解除され、本体部１を開口させることができる。

【００１３】

内釜４は、図４及び図５に示すように、有底円筒形状を有し、誘導加熱により発熱する炭素材で構成される。なお、内釜４は、例えばセラミック等の非金属材料で形成される容器（いわゆる土鍋）またはアルミ等の金属鑄造容器であっても良い。内釜４の内部には、被加熱物である米および水が収容される。内釜４は、開口縁に沿って外側へ向かって突出するフランジ部が全周にわたって設けられている。

30

【００１４】

操作表示部５は、蓋体２の上面部に配置される。操作表示部５は、使用者からの操作入力を受け付けるとともに、操作入力に関する情報および炊飯器１００の動作状態を表示する。なお、図１～図５に示した操作表示部５の具体的構成や配置は一例であり、本発明を限定するものではない。例えば、操作表示部５は、本体部１の前面に設けてもよい。

【００１５】

制御部は、鍋底温度センサーおよび操作表示部５からの出力に基づいて、加熱部に通電する高周波電流の制御など、炊飯器１００の動作全般を制御する。制御部は、その機能を実現する回路デバイスのようなハードウェアで構成することができ、またはマイコンやＣＰＵのような演算装置と、その上で実行されるソフトウェアとにより構成することもできる。制御部は、制御基板に実装され、内釜収納部１０に固定される。

40

【００１６】

蓋体２は、外蓋２０と、内蓋２１とを有している。外蓋２０は、蓋体２の上部を構成し、内釜４に対向する部分である外蓋２０の下部には、係止材を介して、内蓋２１が取り付けられている。蓋体２は、外蓋２０の一端部がヒンジ機構部６によって本体部１の上部に連結されている。ヒンジ機構部６は、ヒンジ軸と、ヒンジバネとを備えている。蓋体２は

50

、ヒンジバネによって、本体部 1 から離れて本体部 1 の開口を開く方向に付勢されている。そして、蓋体 2 は、閉じた状態で蓋開閉ボタン 1 1 が押下されると、ヒンジバネの付勢力により、ヒンジ軸を中心として回転し、本体部 1 から離れる。これにより、本体部 1 は、開口が開かれる。本体部 1 の背面側の側面であって、ヒンジ機構部 6 の下方となる箇所には、開状態となるように起立させた蓋体 2 の下端部と本体部 1 の上面との接触を回避させるために、内方へ凹ませた逃がし部 7 が形成されている（例えば図 1 0 ~ 図 1 3 を参照）。

【 0 0 1 7 】

また、蓋体 2 の内部であって、内蓋 2 1 の上面側には、蓋体 2 に着脱自在に装着された図示省略の排気カートリッジが設けられている。排気カートリッジは、蓋体 2 の上面と面

10

【 0 0 1 8 】

ハンドル 3 は、使用者が手で持って炊飯器 1 0 0 を運搬するために設けられている。ハンドル 3 は、本体部 1 の対向する側面に取り付けられる回転支点部 3 0 と、左右の回転支点部 3 0 を繋ぐ持ち手部 3 1 とを有している。ハンドル 3 は、蓋体 2 の上方で起立する起立位置と、本体部 1 の背面側で倒伏する倒伏位置との間で起伏するように回動自在に設けられている。回転支点部 3 0 は、本体部 1 の側面上部の略前後中央に軸支し、ハンドル 3 の回転方向を蓋体 2 の回動方向と一致させている。使用者は、炊飯器 1 0 0 を運搬する際に、ハンドル 3 の軸支点のほぼ直上に位置するようにハンドル 3 を回転させて持ち上げ、ハンドル 3 の持ち手部 3 1 のみを持って炊飯器 1 0 0 を運搬することができる。また、使

20

【 0 0 1 9 】

実施の形態 1 の炊飯器 1 0 0 のハンドル 3 は、図 2 ~ 図 5 に示すように、倒伏位置において本体部 1 と蓋体 2 との間を跨がるように持ち手部 3 1 が配置されており、倒伏させたハンドル 3 によって、ヒンジ機構部 6 の近傍に位置する本体部 1 の側面及び上面を覆っている。ハンドル 3 の持ち手部 3 1 は、図 2 で示した幅寸 W を、逃がし部 7 に使用者の指が入らない程度の大きさで構成している。また、図 1 ~ 図 5 に示したハンドル 3 の形状は、図 2 に示す側面方向から見ると、ハンドル 3 を倒伏させた状態において、持ち手部 3 1 を回転支点部 3 0 よりも若干上方に位置させた L 字状としている。但し、ハンドル 3 の形状は、図示した形状に限定されない。ハンドル 3 を倒伏させた状態において、本体部 1 と蓋体 2 との間を跨がるように持ち手部 3 1 が配置されていれば良く、種々の態様で実施できる。

30

【 0 0 2 0 】

図 6 は、本発明の実施の形態 1 に係る炊飯器であって、本体部のカバーを外して内部構造を示した斜視図である。図 7 は、図 6 で指示した X 線矢視要部拡大図である。図 8 は、本発明の実施の形態 1 に係る炊飯器の付勢部材の機能を説明した要部拡大図である。炊飯器 1 0 0 は、ハンドル 3 が起立させた状態から前面側に倒れると、蓋体 2 が損傷する虞がある。そこで、ハンドル 3 には、図 6 ~ 図 8 に示したように、一方の回転支点部 3 0 の軸部 3 2 に、起立位置のハンドル 3 を背面側に倒伏させるように付勢する付勢部材として板ばね 3 4 が設けられている。板ばね 3 4 は、ハンドル 3 を起立させると、ハンドル 3 に連動して回転する。ハンドル 3 は、図 8 に示すように、板ばね 3 4 が目標の角度に到達して壁状の規制部材 3 5 に接触すると反発力が生じる。そして、ハンドル 3 は、使用者が手を離すと、板ばね 3 4 の付勢で起立させた状態から自然に倒伏させることができる。よって、炊飯器 1 0 0 は、使用者がハンドル 3 を起立させて持ち運びに使用する以外、常にハンドル 3 を倒伏させた状態とすることができる。なお、付勢部材は、図示した板ばね 3 4 に限定されない。付勢部材は、起立位置のハンドル 3 を背面側に倒伏させるように付勢できる構成であれば、他の構成でもよい。

40

【 0 0 2 1 】

図 9 は、図 6 で指示した Y 線矢視要部拡大図である。図 9 に示すように、ハンドル 3 の

50

回転支点部 30 には、ロータリーダンパー 33 が設けられている。このようにロータリーダンパー 33 を設けることで、付勢部材 34 により勢いよく倒伏されるハンドル 3 にブレーキをかけることができ、ハンドル 3 や本体部 1 に加わる衝撃を抑えることができる。

【0022】

図 10 は、本発明の実施の形態 1 に係る炊飯器であって、ハンドルの重心を倒伏側に偏心させた構成を示した側面図である。図 10 に示すように、ハンドル 3 は、起立位置のハンドル 3 を倒伏させるように重心を倒伏側に偏心させた構成としてもよい。図 10 に示した炊飯器 100 の場合は、一例としてハンドル 3 の回転支点部 30 に、背面側に突き出す突起部 36 を設けて、ハンドル 3 の重心を倒伏側に偏心させている。したがって、ハンドル 3 は、使用者が手を離すと、起立させた状態から自然と倒伏させることができる。なお、突起部 36 は、ハンドル 3 の回転の支点である回転支点部 30 に設けることが望ましいが、持ち手部 31 に設けてもよく、ハンドル 3 の重心を倒伏側に偏心させることができれば、どこに設けてもよい。

10

【0023】

ここで、従来の炊飯器 101 を図 11 ~ 13 に基づいて説明する。図 11 は、従来の炊飯器を背面側から見た斜視図である。図 12 は、従来の炊飯器であって、蓋体が開いた状態の側面図である。図 13 は、従来の炊飯器であって、蓋体が開いた状態を背面側から見た斜視図である。従来の炊飯器 101 では、図 11 ~ 図 13 に示すように、倒伏させたハンドル 3 の持ち手部 31 の位置が、逃がし部 7 及びヒンジ機構部 6 の近傍に位置する本体部 1 の上面よりも下方となるように構成されている。つまり、従来の炊飯器 101 では、ハンドル 3 を倒伏させた状態で、逃がし部 7 及びヒンジ機構部 6 の近傍における本体部 1 の上面が露出している。そのため、使用者が、ハンドル 3 を回転させて倒伏させた後（図 11 を参照）、逃がし部 7 に指を当てたまま誤って蓋体 2 を開状態にすると（図 12 及び図 13 を参照）、蓋体 2 の端部と本体部 1 の側面との間に指を挟む虞がある。また、使用者は、蓋体 2 が開状態である場合に、ヒンジ機構部 6 の近傍に位置する本体部 1 の上面に指を当てたまま誤って蓋体 2 を閉状態にすると（図 11 を参照）、蓋体 2 の下面と本体部 1 の上面との間に指を挟む虞がある。

20

【0024】

そこで、実施の形態 1 の炊飯器 100 のハンドル 3 では、倒伏位置において本体部 1 と蓋体 2 とを跨がるように持ち手部 31 が配置されている。つまり、この炊飯器 100 は、倒伏させたハンドル 3 によって、ヒンジ機構部 6 の近傍に位置する本体部 1 の側面及び上面を覆うことができるので、使用者が逃がし部 7 及びヒンジ機構部 6 の近傍に位置する本体部 1 の上面に指を当てることができない。よって、この炊飯器 100 は、使用者が、蓋体 2 を開閉する際に、蓋体 2 と本体部 1 との間に指を挟むことがなく、安全に使用できる。

30

【0025】

また、実施の形態 1 の炊飯器 100 は、ハンドル 3 の回転支点部 30 に、起立させたハンドル 3 を倒伏させるように働く付勢部材として板ばね 34 が設けられているので、ハンドル 3 を起立させた状態から自然に本体部 1 の背面側に倒伏させることができる。よって、この炊飯器 100 は、使用者がハンドル 3 を起立させて持ち運びに使用する以外、常にハンドル 3 を倒伏させた状態とすることができるので、蓋体 2 と本体部 1 との間に使用者の指を挟む事態を効果的に防止することができる。また、この炊飯器 100 は、蓋体 2 を開ける際に、使用者がわざわざハンドル 3 を倒伏させる必要がないので、使い勝手に優れている。

40

【0026】

実施の形態 2 .

次に、本発明の実施の形態 2 に係る炊飯器を図 14 ~ 19 に基づいて説明する。図 14 は、本発明の実施の形態 2 に係る炊飯器を背面側から見た斜視図である。図 15 は、本発明の実施の形態 2 に係る炊飯器の側面図である。図 16 は、本発明の実施の形態 2 に係る炊飯器であって、蓋体が開く途中段階を示した側面図である。図 17 は、本発明の実施の

50

形態２に係る炊飯器であって、蓋体が開く途中段階を背面側から見た斜視図である。図１８は、本発明の実施の形態２に係る炊飯器であって、蓋体が開く途中段階の要部拡大図である。図１９は、本発明の実施の形態２に係る炊飯器であって、蓋体が開いた状態を背面側から見た斜視図である。なお、実施の形態１で説明した炊飯器１００と同一の構成について、同一の符号を付して、その説明を適宜省略する。

【００２７】

実施の形態２の炊飯器１０２は、図１４～図１９に示すように、蓋体２がヒンジ機構部６の付勢によって閉状態から開状態に回転する際に、ヒンジ機構部６で連結された側の端部をハンドル３の持ち手部３１に当接させて蓋体２を回転させる構成である。本体部１の背面側には、ハンドル３が蓋体２に当接させた状態で倒伏位置に向かって回転する勢いを緩衝させる緩衝部材８が設けられている。

10

【００２８】

緩衝部材８は、一例としてシリンダーダンパーである。シリンダーダンパーは、シリンダー８０と、シリンダー８０内を上下方向にスライド移動するピストン８１と、ピストン８１を覆う上部カバー材８２と、シリンダー８０を収納する下部カバー材８３とで構成されている。なお、図１４及び図１５は、ピストン８１を上部カバー材８２で覆った状態を示し、図１６～図１９では、上部カバー材８２を取り外してシリンダーダンパーの内部構造を分かりやすく示している。実施の形態２の炊飯器１０２は、図１４及び図１５に示したピストン８１を上部カバー材８２で覆った状態が通常の状態である。

【００２９】

20

ピストン８１は、蓋体２が開状態（図１９を参照）となった位置から更にシリンダー８０内を下方へ移動できるように余裕を持たせた構成としている。使用者が、仮に誤って指を挟むようなことがあっても、蓋体２及びハンドル３を回転できるようにするためである。上部カバー材８２は、上面が開口した下部カバー材８３の内部に下部が挿入されて、ピストン８１の上下移動と共に上下方向にスライド移動する。下部カバー材８３は、本体部１の背面側に固定されている。

【００３０】

実施の形態２の炊飯器１０２によれば、蓋体２がヒンジ機構部６の付勢によって閉状態から開状態となる際に、蓋体２が開く途中段階（図１６～図１８を参照）で、蓋体２のヒンジ機構部６で連結された側の端部がハンドル３の持ち手部３１に当接する。そして、蓋体２が当接した状態のハンドル３は、持ち手部３１が緩衝部材８の上部カバー材８２に衝突し、そのまま倒伏位置まで回転される。つまり、実施の形態２の炊飯器１０２は、緩衝部材８によって勢いが緩衝されたハンドル３により、閉状態から開状態に回転する蓋体２の勢いを抑制することができる。よって、実施の形態２の炊飯器１０２は、使用者が逃がし部７に指を当てることがあっても、ゆっくり回転する蓋体２によって指を挟む事態を防止することができるので、安全に使用することができる。

30

【００３１】

なお、緩衝部材８は、図示したシリンダーダンパーに限定されない。緩衝部材８は、蓋体２に当接された状態で倒伏位置に向かって回転するハンドル３の勢いを緩衝させることができれば、他の構成でもよい。

40

【００３２】

以上に本発明を実施の形態に基づいて説明したが、本発明は上述した実施の形態の構成に限定されるものではない。例えば、例えば、本体部１の形状は、円筒形状に限定されるものではなく立方体または直方体であっても良い。要するに、いわゆる当業者が必要に応じてなす種々なる変更、応用、利用の範囲をも本発明の要旨（技術的範囲）に含むことを念のため申し添える。

【符号の説明】

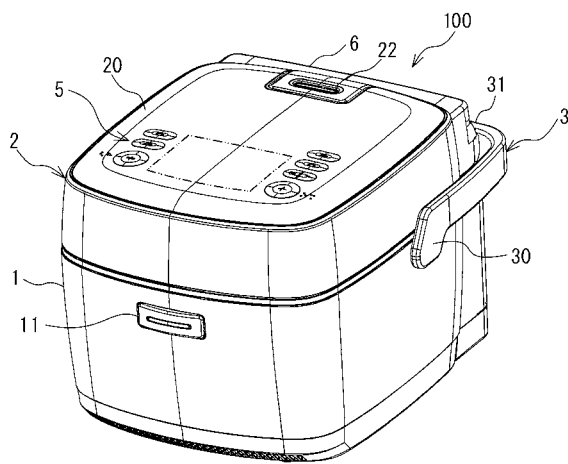
【００３３】

１ 本体部、２ 蓋体、３ ハンドル、４ 内釜、５ 操作表示部、６ ヒンジ機構部、７ 逃がし部、８ 緩衝部材、１０ 内釜収納部、１１ 蓋開閉ボタン、２０ 外蓋、

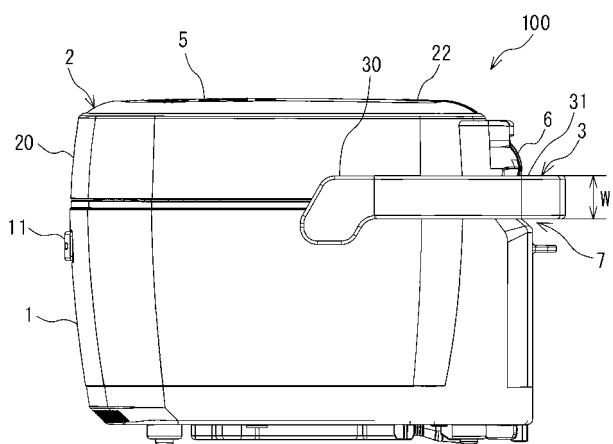
50

2 1 内蓋、2 2 蒸気口、3 0 回転支点部、3 1 持ち手部、3 2 軸部、3 3 口
 ータリーダンパー、3 4 板ばね（付勢部材）、3 5 規制部材、3 6 突起部、8 0
 シリンダー、8 1 ピストン、8 2 上部カバー材、8 3 下部カバー材、1 0 0 ~ 1 0
 2 炊飯器。

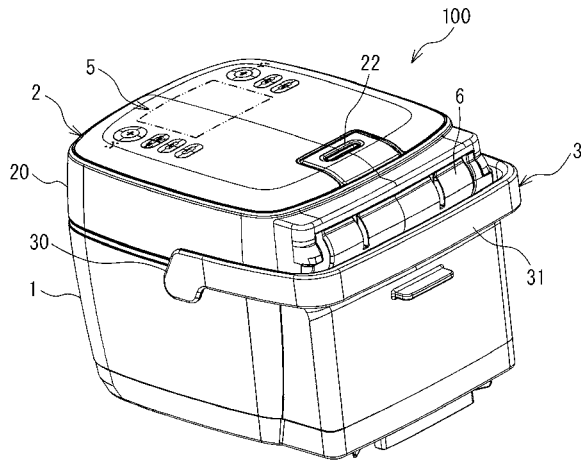
【図 1】



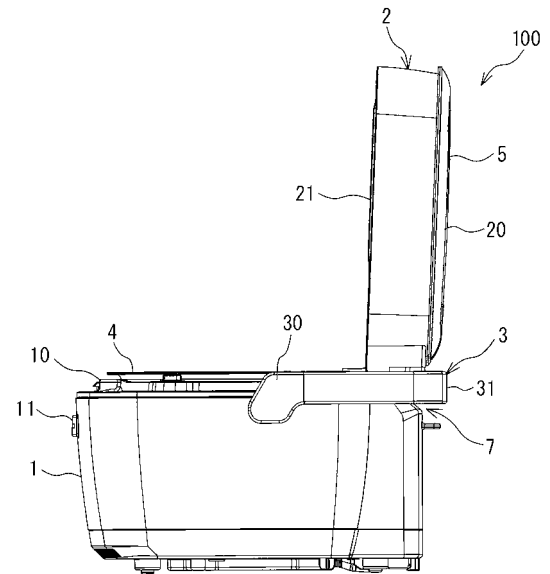
【図 2】



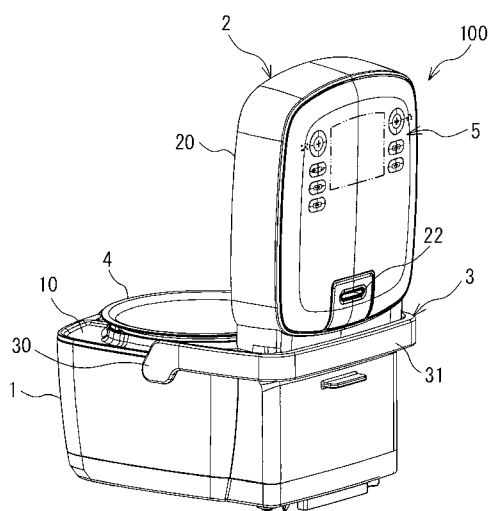
【図 3】



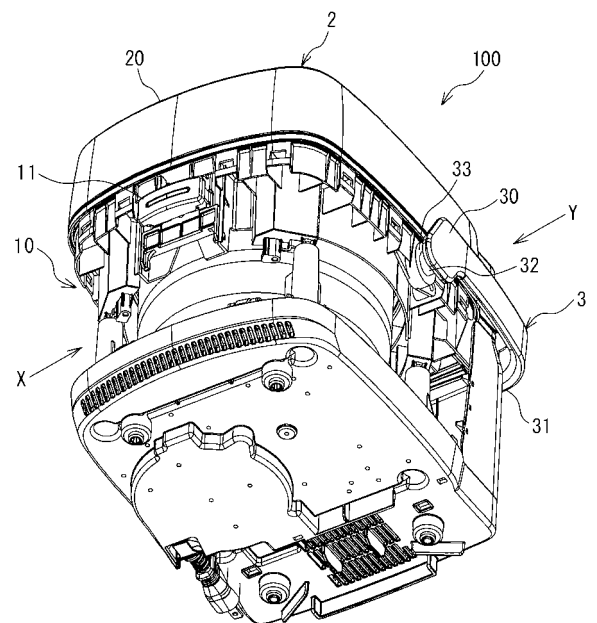
【図 4】



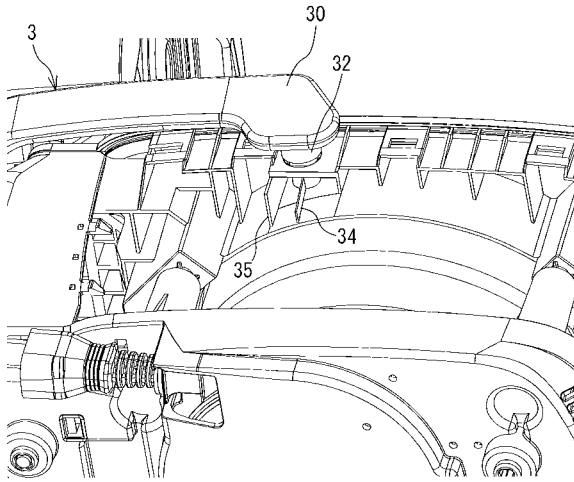
【図 5】



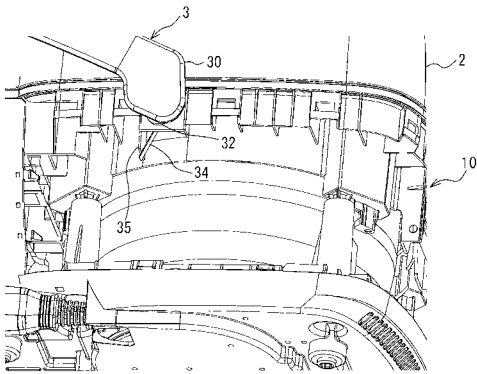
【図 6】



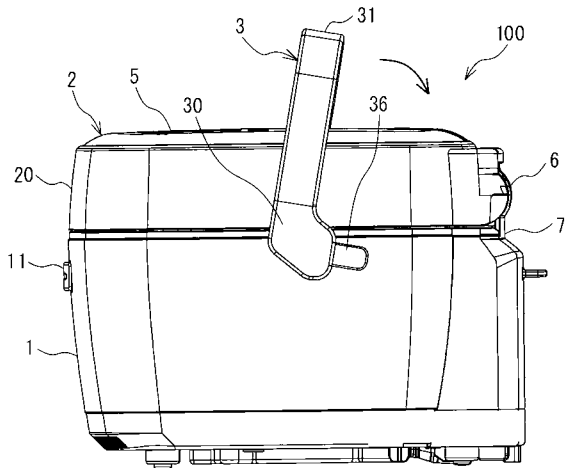
【図 7】



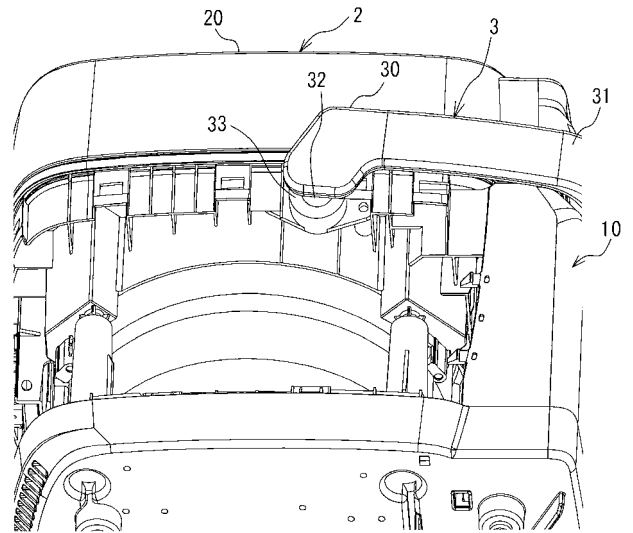
【図 8】



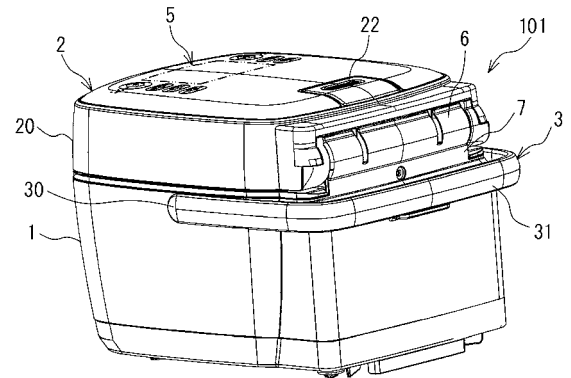
【図 10】



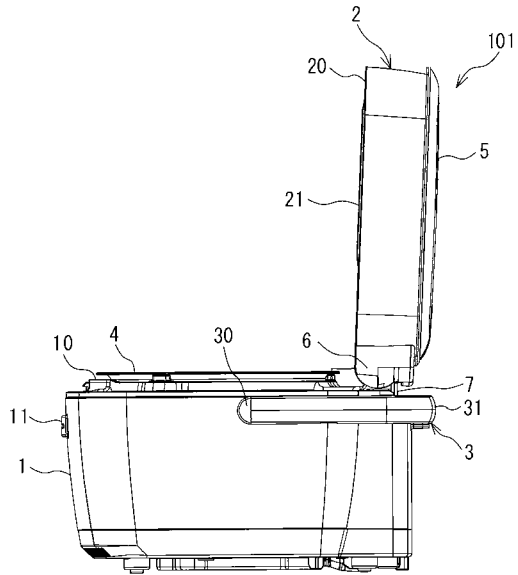
【図 9】



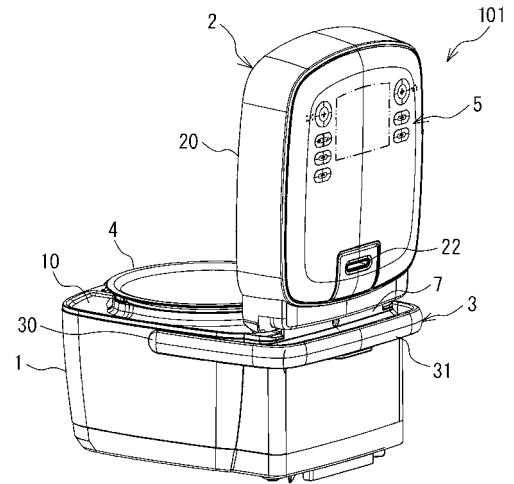
【図 11】



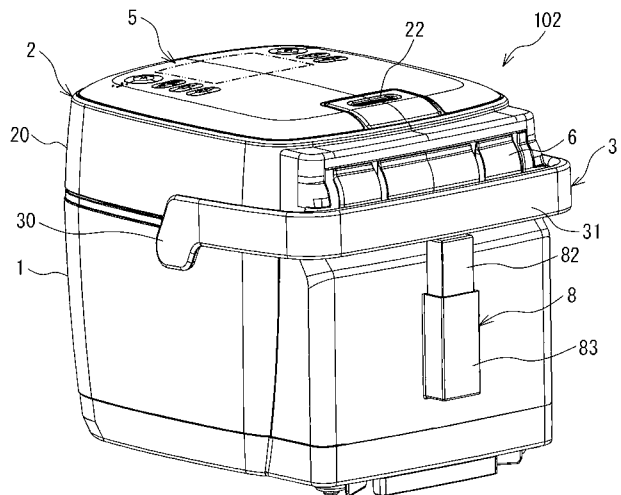
【図 1 2】



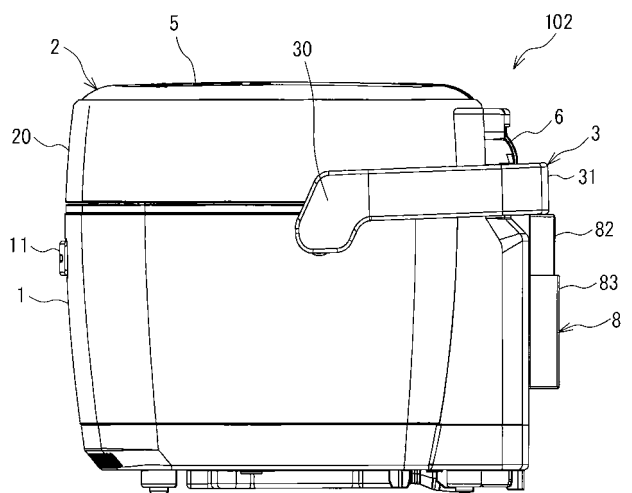
【図 1 3】



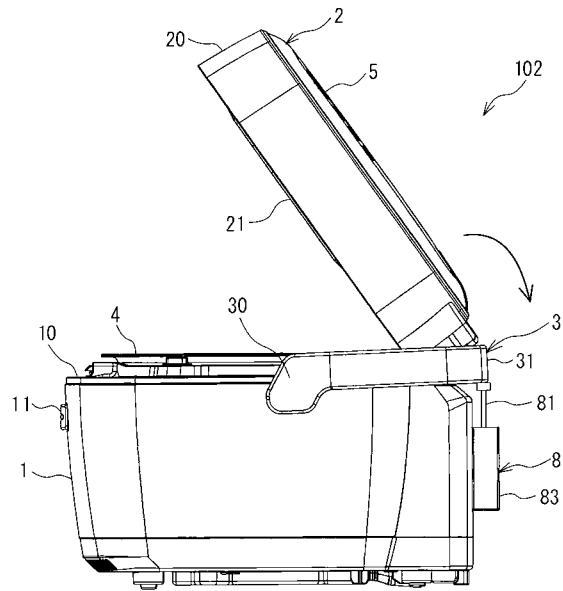
【図 1 4】



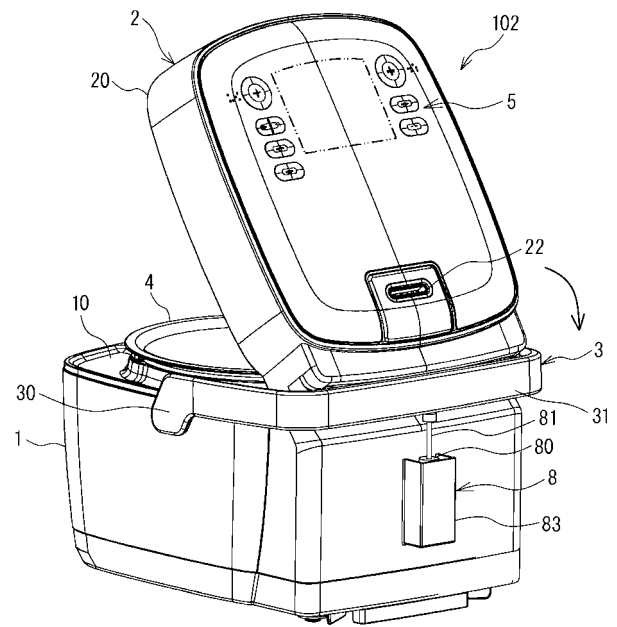
【図 1 5】



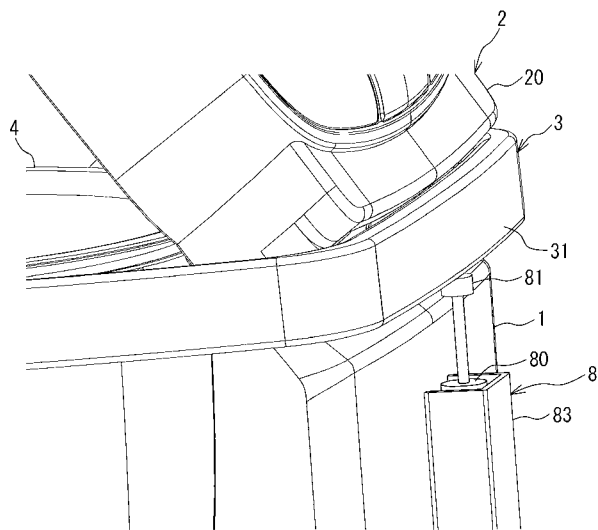
【図 16】



【図 17】



【図 18】



【図 19】

